

➤ バックアップ アプライアンスで実現する 仮想化基盤へのサーバ移行とBCP

45台のサーバ移行が1日で完了



ユーザープロフィール

業 種：本格焼酎などの製造および販売
会社名：霧島ホールディングス株式会社



おかげさまで100周年

課題

本格芋焼酎「霧島」などの販売で焼酎市場を牽引している霧島酒造は、本社サーバーームに加えてBCPの観点からクラウドサービスや事業者データセンターの活用を積極的に推進してきた。しかし、複数のデータセンターでシステムを運用する中でコスト負担が重くなっていった。そこで同社は従来DRサイトとして利用していたデータセンターで稼働している仮想化基盤へのサーバ集約を決めた。

経緯

サーバ集約の前に同社はまずバックアップシステムのリプレイスを行った。採用したのはArcserve Japanのバックアップアプライアンス「Arcserve UDP 7300 Appliance」だった。必要な管理コンポーネントがインストール済みで、メモリ・SSDなどのサイジングも不要、ライセンスが使い放題である点から、バックアップシステムの導入作業やトータルコストを削減できると考えたからだ。

導入

プロジェクトの目的である仮想化基盤へのサーバ移行の際に同社が利用を想定していたのは、Arcserve UDP 7300 ApplianceにプリインストールされているArcserve UDPの「バックアップデータの転送」と「ベアメタル復旧」機能だった。日次の増分バックアップデータをWAN経由で移行先に転送し、仮想化基盤へベアメタル復旧することでサーバ移行の手間と時間を軽減しようとしたのだ。

効果

Arcserve UDP 7300 Applianceは設置後すぐに利用でき、バックアッププランの設定だけで移行作業の用意は完了した。実際、サーバ45台の仮想化基盤への移行は社員の業務停止もなく1日で終了させた。同時に仮想化基盤上のサーバのエージェントレスバックアップも実現していて、エージェントの導入工数やCPUリソースへの負荷軽減も果たしている。



課題

クラウドサービス上で稼働していた サーバシステムを仮想化基盤に集約

本格芋焼酎「霧島」などの販売で日本の焼酎文化の形成に貢献してきた霧島酒造は、2016年に創業100周年を迎えている。最高の芋焼酎を消費者に届けるために、100年にわたって原料、水、品質にこだわり続けてきた。伝統を守りつつ革新をも求めるその姿勢は、国内焼酎市場における4年連続トップシェアに結実している。味だけでなく環境にも配慮し、環境共生型工場での製造や、芋焼酎の生産過程で生み出されるバイオガスの有効利用を目的とした発電事業なども行っている。

日本の焼酎市場を牽引する霧島酒造の事業を支えているのが強固なITシステムだ。特に事業継続の面からバックアップシステムには強いこだわりを持っていて、本社でのデータバックアップに加えて、事業者データセンターにおける仮想化基盤を活用したディザスタリカバリ（DR）体制も構築してきた。

同社のITシステムを管理する霧島ホールディングス株式会社 管理本部 システム管理課 係長の堀之内茂幸氏は、これまでの取り組みについて次のように説明する。「取り扱うデータが肥大化する中で、万全のBCP体制を構築できるように、データバックアップ時間の削減、リストア時間の改善、DRサイトでの復旧時間の短縮に取り組んできました。昨今はデータセンターでの運用やクラウドサービスも積極的に活用しています。システムの継続性だけでなく、人のBCPも意識しているからです。当社はITシステムの運用管理を3人で行っていますが、少ない人員でいかに効率的にシステムを運用するかを考えた場合、データセンターなどの外部リソースを活用してハードウェアのメンテナンス作業の軽減を図ることは必然だったのです」

事業を支えるIT基盤を継続的に強化してきた霧島酒造が今回取り組んだのは、クラウドサービス上で稼働していたアプリケーションサーバなど約45台のサーバシステムを、事業者データセンター上に構築している仮想化基盤に集約するプロジェクトだった。このプロジェクトでは、これまで慣れ親しんできたArcserve Japanのバックアップソフトとバックアップ専用アプライアンスが大きく貢献することになった。



霧島ホールディングス株式会社
管理本部 システム管理課
係長 堀之内 茂幸氏

経緯

バックアップシステムに採用したのは サーバ調達の手間やメモリのサイジングが不要なアプライアンス

霧島酒造は、本社サーバールームのITシステムに加えて、クラウドサービス事業者が提供するIaaS上に構築したシステムや、DRサイトとして利用している事業者データセンターにサーバをハウジングして運用していたが、クラウドサービス事業者とDRサイトの二つのデータセンターのサーバを常時稼働させる体制はコスト負担が重くなっていた。

そこで同社は、IaaS上で稼働していたシステムを、DRサイトでハウジングしているサーバの仮想化基盤に集約し、DRサイトのデータセンターをメインデータセンターとして活用することにした。「以前から試験的にDRサイトの仮想化基盤に一部の業務システムを移行して利用に問題がないか確認していました。従業員はまったく気付かず、むしろアクセス速度が速くなったという感想もあったので、DRサイトのデータセンターの仮想化基盤にサーバを集約してコスト削減を図ることにしました」（堀之内氏）

霧島酒造は、サーバの仮想化基盤への集約に際して、まずDR用サイトで稼働していたバックアップシステムのリ

プレースを行った。採用したのはバックアップ専用アプライアンス「Arcserve UDP 7300 Appliance (以下、Arcserve UDP Appliance)」だった。「従来からバックアップサーバを用意する際には、サーバを調達する手間や重複排除機能使用時のメモリのサイジングなどに悩まされてきました。メモリは使用過程で最適化しなければならず、運用にも支障が出ていたのです。今回も同じような作業をするのは避けたいと考えていました」と堀之内氏は吐露する。そうした悩みを解決する製品として Arcserve UDP Appliance の導入を決めたのだ。

導入

バックアップ環境の刷新と仮想化基盤へのサーバ移行をアプライアンスの活用で手軽に

Arcserve UDP Applianceは、Arcserve UDP Advanced Editionがプリインストールされた中規模システム向けのバックアップ専用アプライアンスだ。必要な管理コンポーネントがインストールされていてすぐに使用できることや、メモリ・SSDなどのサイジングが不要なこと、そしてArcserve UDP Advanced Editionのライセンスが使い放題であることが特長だ。Arcserve UDP Applianceのストレージ容量は12TBで、重複排除機能用のSSD 240GBを標準搭載している。ストレージが不足してきたら台数を増やして補強するスケールアウトも可能で、複数台数を一つの管理画面で統合的に管理できる。

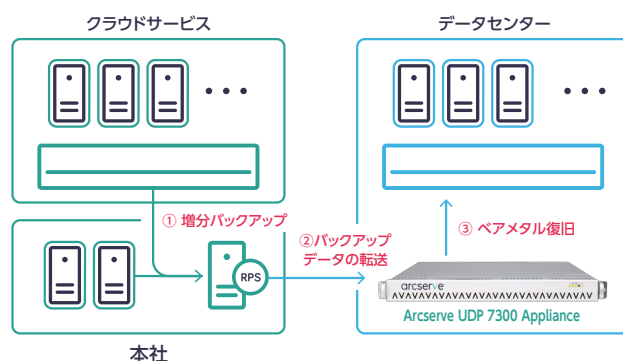
「設置するだけで使用できるアプライアンスの手軽さに魅力を感じました。メモリのサイジングに悩まされないのも非常に嬉しいですね。バックアップ対象のサーバ台数や容量に関係なくライセンスが使い放題である点もコストメリットが高いです。また、オンサイト修理や5年間のメンテナンスが付属している点も管理者が少ない当社にとってありがたいポイントです。コスト的にも、従来のソフト+サーバ+ストレージを導入する場合と比較して、ソフトの料金は入っていないのでは?と思うくらい安い価格でした。作業工数と価格を考えれば、選択肢はほぼArcserve UDP Applianceしかありませんでした」(堀之内氏)

Arcserve UDP Applianceを導入した霧島酒造の次なる課題は、クラウドサービス事業者のIaaS上で稼働している45台のサーバシステムをいかに手間なくDRサイトの仮想化基盤に移行させるかだ。45台のサーバには約6TBのデータが蓄積されていた。しかし同社ではシステム移行を手軽に済ませるための見通しが最初からついていなかった。Arcserve UDPの基本機能である「増分バックアップ」「バックアップデータの転送」、そして「ベアメタル復旧」の利用だった。

Arcserve UDPでは、最初にフルバックアップを取得した後の2回目以降は増分バックアップのみで運用でき、最小データだけがWAN経由でデータセンターに転送されてDRサイトには完全なバックアップデータが保存される。本番システムに障害が発生した場合はベアメタル復旧するだけで業務を再開できるようになる。霧島酒造はこの機能をサーバの仮想化基盤への移行に利用しようと考えたのだ。「以前からArcserve UDPのベアメタル復旧機能はバックアップ・リストアシステムの構築時に活用していて、バックアップ運用だけに利用するのはもったいないと考えていたのです」(堀之内氏)

仮想マシンの簡単移行

仮想マシンの移行は日々のバックアップ運用を活用して3ステップで完了





効果

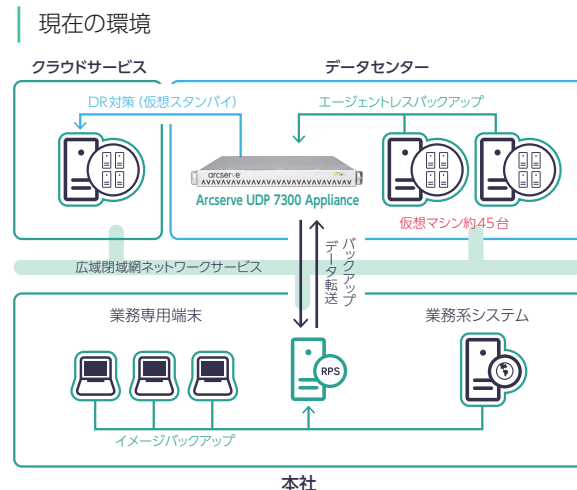
45台のサーバ移行は1日で完了 エージェントレスの低負荷バックアップも実現

Arcserve UDP ApplianceとArcserve UDPのベアメタル復旧機能を活用した仮想化基盤へのサーバ移行作業はいとも簡単に終了した。Arcserve UDP Applianceはウィザードに従った基本的な設定ですぐに使えるようになり、「バックアッププランの設定だけで移行作業の用意が完了しました」と堀之内氏は話す。

通常ならば移行用にフルバックアップを新たに取得して、そのデータを移行先のデータセンターへ物理的に運搬し、ベアメタル復旧する手順が生じる。その場合、移行期間中は差異が生じないように稼働サーバの利用を停止させなければならない。移行には数日を要することもある。しかし、今回は移行先にあらかじめバックアップデータが保存されているため、移行当日はベアメタル復旧を行うだけでよい。実際の所、Arcserve UDP Applianceの導入からサーバ45台の仮想化基盤への移行まで1日で終了した。

仮想化基盤へのサーバ集約と同時に霧島酒造ではエージェントレスでのバックアップも実現させている。Arcserve UDPでは仮想マシンごとにエージェントをインストールすることなく、システムの丸ごとバックアップとファイル単位でのリストアが行える。「エージェントレスバックアップによって、エージェントの導入工数やCPUリソースへの負荷の軽減も実現しました」と堀之内氏は喜ぶ。DRのため最終的に仮想化基盤に移動させたサーバ45台分の6TBのデータは、初回バックアップ時に圧縮されてArcserve UDP Appliance上では3TBほどになっている。現在は増分バックアップで毎日5分以内にバックアップは終了している。重要なサーバはクラウドサービス事業者のIaaSに「仮想スタンバイ」機能でBCP対策することもある。

Arcserve UDP Applianceの導入で、仮想化基盤への45台のサーバ移行を難なく成功させ、システム全体として約1割のコスト削減を実現した霧島酒造の次なる目標は、東日本にあるデータセンターでのアプライアンスを活用したDR環境の構築だ。「本社がある宮崎県で災害があった場合でも全国の拠点では業務を継続させなければなりません。そうした状況を考慮すると地域を分散したBCP体制を構築する必要がありますね」と堀之内氏は意気込む。その実現にもArcserve UDP Applianceを活用する予定だ。



arcserve®

Arcserve Japan

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング
Arcserve ジャパン ダイレクト 0120-410-116

※記載事項は変更になる場合がございます 2016年9月版

お問い合わせ

すべての製品名、サービス名、会社名およびロゴは、各社の商標、または登録商標です。
製品の仕様・性能は予告なく変更する場合がありますので、ご了承ください。
Copyright ©2016 Arcserve(USA), LLC. All rights reserved.

詳しくはWebで!

arcserve.com/jp

検索

Printed in JAPAN